



第 17 回

## 人づくりは木づくりだ

・細川重賢

作家 童門冬二

江戸時代の改革はやはり改革の推進者であるトップが辛い生活を送った、いわゆる苦労人の場合のほうが成功度が高い。名君といわれた米沢藩主上杉鷹山もそうだし、上杉鷹山のちょっと先輩に当たる熊本藩主細川重賢もそうだ。鷹山は、他家から養子に入ったトップだが、重賢は生えぬきの細川家の出身だ。しかし若いころは藩主を継げる可能性はなくいわゆる"居候的存在"として、肩身の狭い思いをしていた。かれは多く江戸藩邸でくらしが、自室の畳は破れ障子も穴だらけだった。それを重賢は丹念に食い残した飯を糊にして紙を貼りつけて防いだ。学問好きだったので、新刊本も多く欲しかったが金がない。そこで部下に自分の羽織などを質屋に持っていかせて買ったという。その役をつとめる部下はそんな重賢に、

(ほんとうなら自分が若様にそんな苦労をさせずに書物を購入すべきなのだろうが、肝心な自分にも藩は給与を半減してしまったのでゆとりがない。誠においたわしい)

と、質屋へ走りながら涙を流したという。そんな重賢が突然家の事情で七代目の肥後熊本藩主になった。江戸にいたときからかれは当時の熊本藩細川家が大変な財政難に陥っていることを知っていた。だからこそかれのくらしも江戸の長屋の庶民のように苦しかったのである。

熊本城に入城したかれは、全家臣を大広間に集めてこういった。

「はからずも自分が藩主になった。しかし現在の

細川家は大変な財政難に襲われている。これを打破するために、自分は非常の措置をとる。どうか協力してもらいたい」

そう前置きしたかれは、次のような方針を発表した。

- ・現在、藩士の給与は一律二分の一支給となっているが、これを給料の安いほうから全額支給に変える。重役陣はしばらくの間我慢して欲しい
- ・上意下達を活発にするために、下級武士が直接わたしのところへ意見書を提出することをすすめる。その場合、手続としては藩主に意見書を出すということだけは、直属上司に報告せよ。しかし直属上司はその内容を調べて、提出を止めたり握り潰したりすることはゆるさない
- ・また、わたしの情報提供や指示命令は、必ず滞りなく下部にも達するように努力して欲しい

そしてこういうことを徹底するためにかれは、「藩校を設立する」と宣言した。重役たちは驚いた。こういった。

「それだけでなく藩財政が赤字だというのに、改めて"金食い虫"である学校をお設けになることには賛成できません」

「その考えは違うぞ」と重賢はいう。

「わしの改革をすすめるためには、どうしても城の武士の意識改革が大切だ。意識改革をおこなう

のにはなによりも研修を欠くことができない。新しく設ける藩校は城の武士の意識改革を目的とする。もちろん、城下町の商人や市民の子弟が学ぶことも認めよう」

こうして新しく藩校を設立するために、重賢はかねて腹心の者に調べさせていた学者を指名した。秋山玉山(あきやま・ぎょくざん)という人物である。玉山は変わっていて私塾を開いていたが、門人たちには、

「疲れたら寝っ転がってもいい。また、酒の好きな者はチビリチビリやってもいいぞ。わたしの講義は、きちんと正座してきくようなものではない、ハッハハ」

と大きく笑った。門人たちも笑い出した。師の玉山にそういわれて、寝っ転がって話をきいたり、講義中に酒を飲むような者はいない。これは巧妙な玉山の門人支配術であった。玉山は、

「師のわしが大びらに胸を開けば、門人たちもそれに応じてくれる」

と思っていた。この話をきいた重賢は、「その人物こそ、新しく設ける藩校の校長に相応しい」と思った。秋山玉山を城に呼んだ重賢はこういった。

「先生は、この国の名大工さんです」

「わたしが名大工とは？」

話がみえず玉山はきいた。重賢は微笑んでこういった。

「人づくりの名人だからです」

「なるほど」

重賢のいい方に玉山は感心した。重賢はさらにつづけてこう告げた。

- ・人づくりは木づくりです
- ・そのためには木配りが大切です

・学ぶ者はすべて苗木です

・それぞれ性格と能力が違います。したがって、その木がなんの木であるかということのみきわめ、肥料や剪定、添え木などのその木にみあった手当が必要です

・その前提となる「なんの木であるか」というみきわめが木配りなのです

「うーん」

くだけた性格の玉山も捻った。まじまじと重賢をみつめた。

(この新しい殿様は、実に人間というものをよくご存知だ)

と感じたからである。秋山玉山は校長を引き受けた。そして重賢の方針どおり"木配り"をおこないながら、"木づくり"につとめた。学校の名は、「時習館」と名づけられた。これは論語の冒頭にある、

「時に学んでこれを習う、またよろこばしからずや」

という一文からとったものだ。重賢の方針は、

・時習館から出された予算要求書は、絶対に査定をしてはならない。必ず全額支給するように努力せよ

・それは、学ぶ者や教える者に金の心配などさせていたら、ろくな教育はできないからだ

これは重賢の卓見である。そして、もっといえば秋山玉山とほんとうに親しい学者に細井平洲という人物がいた。平洲はそのころ上杉鷹山の学師になっていた。したがって上杉鷹山が展開した諸改革の中には、かなり細井平洲が秋山玉山からきいて、それを鷹山に伝えたものも含まれている。いわば"学者間ネットワーク"が効果を奏したのである。細川重賢も鷹山に劣らぬ名君であった。